

二〇二五年度 北陸大学一般選抜（本学独自方式） A日程問題

（二月四日実施）

国語

（注 意）

- 一、問題冊子は本文9ページ、解答用紙は2枚（解答用マークシート1枚と記述式解答用紙1枚）。
- 二、マークシートの問題は、解答欄1から9のあてはまる選択肢の枠内をぬりつぶすこと（複数解答は無効）。
- 三、他の問題の解答は、記述式解答用紙の指定の欄に記入すること（*内には記入しないこと）。
- 三、解答用マークシート・記述式解答用紙は、持ち帰ってはならない。
- 四、試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。
- 五、コピー及び二次利用は行わないこと。

「一」 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

探究を自ら経験し、その楽しさを味わい、それが習慣となること。それが探究エピステモロジーを持つためには絶対に必要である。では、そのためにはどのように子どもを教育したらよいのだろうか。

まず、ことばに要注意である。言語を習得するとき、大人が外国語を学ぶときに「教えてもらわなければわからない」と思っていることを、母語を学ぶ子どもはすべて自分で発見し、自分の身体の一部にしている。つまり、極論すれば、子どもに発見することの大事さなど教える必要はないということになる。子どもは生まれながらに、自分で知識を発見するようになってきているのだから。

I

子どもが探究エピステモロジーを失ってしまうのはなぜだろうか？

ことばがわかるようになると、ことばで「教える」「教えられる」ことができるようになる。人類は言語を持つことで先駆者が築いてきた知識を次世代に受け継ぎ、その知性を進化させてきた。ことばで指示し、教えることは知識を共有するために非常に「効率的」だ。しかし、その効率性の背後に危うさも潜む。ことばを使って教えられるとき、言っていることの、あるいは書かれていることの、その字面だけを理解してわかった気になってしまうのである。ことばで教えられ、それを「覚える」と、ほんとうは理解していないのに、「覚えたからわかった」と思ってしまう。教えるほうも、質問をしたときに相手がキーワードを使って答えると「理解した」と思ってしまう。教えるほうも教わるほうもことばで教える、教わるのは効率的なので、それが規範となってしまう、「覚える」ことが知識を得ることだ、たくさん覚えることが最もよいことだという「ドネルケバブ・エピステモロジー」を持つてしまうのだ。

「たくさん覚えることが大事」というドネルケバブ・エピステモロジーを親が持つと、できるだけたくさん知識を効率よく得ることが子どもにとってもよいことだと考える。すると、子どもがじっくりと好きなように遊んだり考えたりするよりも、ことばで記述された、たくさん「知識の断片」を覚えることのほうが大事だと思ってしまう。かくして子どもは小さいころから「教えてもらおうことを覚える」のに慣れ、それが当たり前だと思ってしまう、生来実践していた「自ら発見する」ことをしなくなってしまうのである。

もちろん、ことばを介して学ぶことがいけないと言っているわけではない。そこは誤解しないでほしい。子どもはことばを通して多くの知識を学ばし、それは社会で生きるために習得しなければならぬ巨大な概念のシステムを立ち上げるのに絶対に必要なことだ。しかし、小さい子どもはことばを暗記するのではなく、ことばが指し示す概念を自分で推論して学ぶ。(中略)

暗記のすべてが悪いと言いたいわけではない。その意味を深く理解しようとせずに、とにかく暗記すればその概念を知ったことになる、というエピステモロジーのもとでの暗記が、ドネルケバブ様の知識になってしまふのだ。

エピステモロジーは生き方の問題でもある。子どもは親や教師の背中を見て育つ。子どもは探究するべきだが、自分はもう学校教育を卒業したから自分には関係ない、あるいは子どもを探究人にするのは学校に任せておけばよいという気持ちを親や教師が持っていたら探究人は育たない。探究の芽を育むのは日々の生活である。とくに遊びは探究の宝庫である。

探究エピステモロジーを育てるために大事なこと。そのひとつは、もちろん自分で発見すること、自分で何かを創り出すことに喜びを見いだすことだ。しかし、それと同じくらい大事なのに忘れがちなことは、粘り強さを育てることである。

「粘り強さ」ということばもいろいろに解釈できることばで、人はそれぞれ違う意味で納得してしまいがちだ。ここでいう「粘り強さ」は、英語でいうと二つの違う意味のことば、エンデュランス(endurance)とレジリエンス(resilience)を併せた概念、つまり長くつづけられる「根気」と、失敗してもあきらめない「打たれ強さ」の両方と想ってほしい。(中略)超一流の熟達者になるための条件で最も大事なことは、集中した訓練をずっと何年も何年も毎日つづけられることだ。創造性は訓練の積み重ねの先に生まれる。その過程において必要な「粘り強さ」は同じことを日々新しい視点ですつとつづけられる心、その時につまづいてもあきらめずに乗り越えられる心だ。

子どもはもともと発見、創造を得意としている。しかし、飽きっぽい。子どものうちに鍛えなければならないのは、創造性よりもむしろ、難しいことをすぐにあきらめず、同じことを繰り返すことに飽きたりせず、粘り強くつづける力なのである。その「粘り強さ」を育むのが遊びだ。

遊びの効用はいろいろある。遊びは、人をリフレッシュさせ、人との社会的な関係を築いていくのに役立つ。運動をとまなう遊びは運動能力の発達にも重要だ。しかし、それ以上に、子どもの時の遊びは知性の発達に非常に重要なのである。

知性の発達の根幹は、象徴する能力である。人間以外の動物と比べて人間が格段に違っているのは、この「象徴能力」であると言ってもよいだろう。一般的には「象徴」ということばは「ハトは平和の象徴」というように使われる。ここでの「象徴」は、目に見えない抽象的な概念をある具体物に代表させる機能という意味で使われている。しかし、本来「象徴」というのはその逆の方向、**II** 具体から情報のエッセンスだけを取り出し抽象化したものなのである。私たちが目の前にしているモノや出来事は、膨大な情報を含んでいる。同じモノでも光の当たり方によって目に入ってくる情報は違う。膨大な情報を必要最小限のエッセンスに圧縮し、抽象化したものが象徴(シンボル)である。

私たちは絵を描くとき、程度の差はあれ、すべて自分で観た世界をシンボル化している。どんなに精密な具象画でも、目にした世界をある一定の光や環境のもとで切り取り、自分の解釈を加えて「心で観た世界」を描くのである。

言語は究極の象徴だ。ことばはモノや動作、出来事に対し、絞り込まれた特定の基準だけに注目してカテゴリーをつくる。つまり、言語は世界を多様なしかし一貫した基準で切り取り、まとめ、象徴化し、さらに個々の象徴を関連づけてシステムをつくっているのである。世界の膨大な情報の中で不必要なものを捨象し、象徴にすることによって、私たちは一つの象徴を他の象徴と組み合わせ、新しい象徴、つまり「新しい知識」をつくることができるようになる。

子どもは自然と「ごっこ遊び」をする。ごっこ遊びの中で子どもは、モノの特徴に惑わされずにモノを象徴的に扱う能力を発達させていく。Ⅲ、子どもが、コップがないのに何かをコップに見立てて（あるいはモノなしで）コップで飲む真似をしていたら、コップの色や形に関係なく、コップの機能を理解し、それを象徴化して「コップで飲むふり」をしていたということだ。子どもは遊びを通じて、ことばを学ぶために必要な世界の様々な様相を切り取り象徴化することを試していると言ってもよい。

実際、ごっこ遊びと言語の発達は連動して起こっている。最初は哺乳瓶の形をしたおもちゃがないと人形にミルクを飲ませることができなかったのが、少し大きくなると積み木などの機能が定まっていけないモノで代用できるようになる。そのうち、モノがなくても「ふり」だけで人形にミルクをあげることができる。あるいは哺乳瓶とはまったく形も機能も違うものを哺乳瓶に見立てることができるようになる。このように、ことばと象徴能力は遊びを仲介にしていっしょに発達していくのである。

（今井むつみ『字びとは何か―探求人』になるために』より一部改変）

一、 空欄 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ に入る語句として、最もふさわしいものを、次の選択肢から一つずつ選びなさい。（マークシート解答欄1～3）

- 1 つまり
- 2 しかし
- 3 あるいは
- 4 例えば
- 5 これらは
- 6 では

二、 傍線部アについて、「効率的」の意味として最もふさわしいものを、次の選択肢から一つ選びなさい。

(マークシート解答欄4)

- 1 予め決めておくこと
- 2 自分から働きかけること
- 3 無駄がないこと
- 4 他に動かされること
- 5 自分の意志で行動すること

三、 傍線部イを親が持つと子どもはどうなってしまうのか、本文中の内容に即した具体的な説明を七〇字以上七五字以内で記述式解答欄に書きなさい。

四、 傍線部ウとはどのような力か、本文中の内容に即した具体的な説明を四〇字以上四五字以内で記述式解答欄に書きなさい。

五、 傍線部エをつくるために必要なことは何か、本文中から二字と四字で抜き出して記述式解答欄に書きなさい。

六、 本文の内容として誤っているものを、次の選択肢から一つ選びなさい。

(マークシート解答欄5)

- 1 探究の芽を育むのは日々の生活であり、とくに遊びは探究の宝庫である。
- 2 人類は言語を持つことで先駆者が築いてきた知識を次世代に受け継ぎ、その知性を進化させてきた。
- 3 子どもは生まれながらに、自分で知識を発見するようにできているのだから、子どもに発見することの大事さなど教える必要はない。
- 4 子どもは遊びを通じて、ことばを学ぶために必要な世界の様々な様相を切り取り象徴化することを試している。
- 5 小さい子どもはことばを暗記するのではなく、ことばが指し示す概念を自分で直観して学ぶ。

「二」 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

何かの情報に接した時には、その情報の「次数」を考えてみるのが非常に大切である。なぜなら、ア一般に情報の「次数」が上がっていくほど、情報の質は落ちていき、正確さを欠くようになる、という法則のようなものがあるからだ。

具体例を挙げて説明しよう。あなたの目の前で女性が駅のホームから転落し、列車にひかれたとする。あなたは転落の瞬間を自分の目で見た。このように自分の五感で直接知覚した情報は「一次情報」であり、あなたが夢でも見ていない限り、転落の発生は100パーセント疑いようのない正確な事実である。

次に、転落の瞬間は見えていないものの、騒ぎを聞いて現場に駆け付けたあなたが、目撃者から事故の様子を聞いた場合、その情報は「二次情報」になる。この段階で既に、情報の精度が落ちている可能性がある。目撃者が「自分の考え」を交えて話していたり、何かを見間違えていたり、最悪の場合は作り話をしている可能性があるからだ。

あなたは目撃者から聞いた情報をもとに、混乱する駅の様子を写真に撮り、ツイッター（※問題作成者注）に投稿した。この投稿を見た人にとって、あなたからの情報は「三次情報」だ。次にこの投稿を見た人が、自分でコメントを付けてツイート（※問題作成者注）を拡散した。これは次の人にとっては「四次情報」である。

ここまで来ると、情報の精度は相当低い。転落したのが本当は「中年女性」であったにもかかわらず、たまたま誰かが「制服を着ているように見えた」と感想を交えて情報を伝言したことにより、「四次情報」の段階では「転落したのは女子高生」になっていたりする。

マスメディアで働く記者が、転落した人物の性別や年齢を間違えて報道するようなミスは極めて少ない。プロの記者は、そうした基礎情報については事故を処理した警察で入念に確認するからである。

A、マスメディアが事故の詳細まで正確に伝えているかという点、必ずしもそうではない。何か事故や事件が起きると、まず現場に警察官が赴く。

しかし、駅ホームでの転落事故の場合は、現場に行った警察官も事故の瞬間を見ていたわけではないので、目撃者から聴取した情報は既に「二次情報」だ。その「二次情報」が上司の課長に報告されると、課長は被害者の自宅や勤務先などから得た情報を加味して、転落が「自殺」なのか「不慮の事故」なの

か「第三者による故意」犯罪」なのかを判断する。この時点で課長が作成した事故に関する書類は、既に「三次情報」だ。この「三次情報」が警察署の広報担当の副署長に報告され、記者の耳に入る。記者の仕事は忙しいので、よほどのことがなければ現場に行くような追加取材はせず、警察の発表をもとに記事を書く。記事が読者の目に触れた時、これは既に「四次情報」である。

記者の中には、ジャーナリズムの基本に忠実に、現場の駅へ足を運び、可能な限り「次数の低い情報」にアクセスしようと試みる良質な記者もいる。

現場へ行くと、マスメディアが読者・視聴者に届けた「四次情報」にはなかった真相が新たに判明することもある。例えば、ホームが異様に狭いとか、事故が起きたのはホーム上が非常に混雑する時間帯だった、といったことだ。警察発表に基づいて書いた記事では、あたかも転落した本人の過失であるかのように描かれていた事故が、ここで初めてホームの構造に起因する問題であった可能性が見えてくる。真実への近道は、可能な限り一次情報に近づくことである。

先ほど、ホームからの転落事故を目撃したのであれば、それは「一次情報」であり、転落の発生は疑いのない事実であると記した。

しかし、イ「一次情報でさえあれば、常に「良質な情報」と言えるのかは全く別の問題である。例えば、現代社会では、内閣官房、中央省庁、政党、企業、大学、都道府県庁、市町村役場、捜査機関、国際機関、財団法人——などのどのような組織であっても、必ず広報担当部署や広報担当者を置いて情報を管理している。

各組織の広報担当部署の仕事は、知らせたい情報を積極的に広報することである。企業であれば、新商品や新サービスの開発などを広報することである。

私たちの周りには、「携帯電話企業A社が若者向けに新サービスを始める」といったようなニュースが溢れている。それはそれで、消費者にとっては大切な「一次情報」ではある。

しかし、裏を返せば、それは「B」でしかないとも言える。どのような組織であれ、知らせたい情報を積極的に広報しているのと同時に、知られたいくない情報を可能な限り隠しながら仕事している。

その新サービスが本当に社会全体にとって有益なのか。そのサービスを始めることによって、何か新しい問題は起きないのか。企業が新サービスのそうした負の側面を物語るデータを積極的に広報していたら、新サービスは最初から赤字になってしまう。

したがって、「何かの情報がデータに接した時には「何が明らかにされているか」だけではなく「何が明らかにされていないか」を想像することが非常に

大切である。これは一朝一夕にできることではなく、プロのジャーナリストにとっても大変難しい作業だ。修練を必要とする難しいテクニックではあるが、膨大な発表情報の裏には膨大な「隠し事」があることを知っておいていただきたいと思う。

(白戸圭一『はじめてのニュース・リテラシー』より一部改変)

(※問題作成者注) ツイッターは2023年に「エックス(X)」に名称を変更。これに伴い、「ツイート」は「ポスト」と呼ばれるようになっていく。

一、 傍線部アの理由を二〇字以上四〇字以内で記述式解答欄に書きなさい。

二、 空欄 A に入る接続詞として、最もふさわしいものを、次の選択肢から一つ選びなさい。

(マークシート解答欄6)

- 1 だから
- 2 しかし
- 3 そして
- 4 つまり
- 5 例えば
- 6 したがって

三、 傍線部イの理由を二〇字以上四〇字以内で記述式解答欄に書きなさい。

四、 空欄 B に入る文章として、最もふさわしいものを、次の選択肢から一つ選びなさい。

(マークシート解答欄7)

- 1 新しい問題が起きないA社の一次情報
- 2 社会全体にとって有益なA社の情報
- 3 消費者が知る必要がないA社の情報
- 4 A社がより多くの利益を上げるための情報

五、 傍線部ウの理由を二〇字以上四〇字以内で記述式解答欄に書きなさい。

六、 個人が評価を書き込む「口コミサイト」のレビューは何次情報にあたるか。次の選択肢から一つ選びなさい。

(マークシート解答欄8)

- 1 一次情報
- 2 二次情報
- 3 三次情報
- 4 四次情報

七、 本文の内容として誤っているものを、次の選択肢から一つ選びなさい。

(マークシート解答欄9)

- 1 一次情報に近づくことは、真実への近道である。
- 2 隠されている情報やデータを想像することは重要である。
- 3 四次情報の精度は相当低い。
- 4 一次情報は正確性が高く、良質な情報である。
- 5 現場に警察官が目撃者から聴取した情報をもとに課長が作成した書類は「三次情報」である。

【三】以下の問いに答えなさい。

一、次の傍線部について、漢字の読み方をひらがなに、カタカナを漢字に直して、記述式解答用紙に書きなさい。

- 1 雨の日は出掛けるのが煩わしい。
- 2 王様から勲章を賜った。
- 3 返答に窮した。
- 4 状況を把握できていない。
- 5 自然治癒力にかけてみよう。
- 6 そんなことをしたら名がスタる。
- 7 両国のミゾは深まるばかりだ。
- 8 取引先との会話がハズんだ。
- 9 卒業旅行をマンキツした。
- 10 疲れたのでサービスエリアでキュウケイした。

二、次の四字熟語やことわざについて、□にあてはまる漢字を、記述式解答用紙に書きなさい。

- 1 彼に任せるなんて時期□□だ。
- 2 九分九□、大丈夫だろう。
- 3 危機一□で助かった。
- 4 試合に負け、意気消□している。
- 5 栄□盛衰は世の常だ。

